

大田英昭著

『日本社会主義思想史序説』

——明治国家への対抗構想』



評者：梅森 直之

はじめに

日本社会主義思想史へのアプローチは、大きく分けて二つの視角がある。その第一は、社会主義理論を補助線とするものである。その際分析は、日本の社会主義者のテキストから、その社会主義の理論を抽出し、それをより「先進的」とみなされた社会主義理論と比較し、その異同を明らかにすることにより行われる。その第二は、日本の歴史的経験に定位するものである。その分析は、日本において、特定の時代に、いかなる問題が発生し、その問題を当該の社会主義者たちが、どのように理解し、行動したかを明らかにすることにある。

こうした二つの視角は、社会主義がその対象とする資本主義そのもののグローバルかつローカルな性格を反映している。理論的考察が重要であるのは、資本主義の普遍的性質に基づく。資本主義は、その発生の当初からグローバルに展開し、こんにち人類の生活のほとんどを包摂する社会原理となっている。したがって、資本主義を分析・批判の対象とする社会主義もまた、普遍的・グローバルな性格を帯びざるをえないのである。資本主義の普遍的性格が、ローカルな社会主義の経験を相互に結びつけ、その

間の比較を可能とするメディアとなる。

これに対し、具体的な歴史経験の分析が重要であるのは、資本主義発展の不均等な性格に基づく。資本主義は、そのグローバルな展開にあたり、あらゆる地域で均質な発展をもたらすわけではない。むしろ資本主義は中心と周辺との発展的差異を搾取することで駆動するシステムであり、その境界線もつねに移動させてゆく。この意味で、ローカルな経験の多様性・固有性もまた、資本主義発展の普遍的性格の本質的部分である。そうした多様な諸経験は、資本主義への包摂にあたって、完全に無化されるわけではなく、抵抗・利用の両面を伴いながら、地域的に固有な資本主義を構成してゆく。資本主義の経験とは、それを生きる人びとにとって、時間的・空間的に固有な経験の集積である。多様なかたちであられるローカルな経験を、グローバルな資本主義の運動のうちに位置づけていくことが、社会主義研究の本質的な部分を構成する。

こうした二つのアプローチは、相互に排他的なものではなく、むしろすべての社会主義思想史の語りにおいて必要な要素であるといえる。したがって、社会主義思想史のオリジナリティとは、この二つの視角を、どのような割合で配合するかに還元される。資本主義や社会主義と同様に、社会主義思想史もまた、理論と経験のせめぎ合いとして成り立つ。

本書の構成

大田英昭『日本社会主義思想史序説——明治国家への対抗構想』は、歴史的経験の固有性から出発し、日本社会主義の実相に迫ろうとした著作である。序章では、著者自身が、日本における社会主義の歴史をどのように把握したかが、以下のような通史的時期区分とともに語られている。第一期＝19世紀後期（社会主義概

念の受容), 第二期 = 19・20 世紀転換期 (社会主義思想の運動化と多様化), 第三期 = 両大戦間期 (国際社会主義運動の分裂と日本), 第四期 = 第二次大戦後 (冷戦構造の中の社会主義), および第五期 = 冷戦終結後, である。序説と題されていることから明らかなように, 本書は, これらすべての時期を網羅したものではない。本書が, 焦点を合わせるのは, このうち第一期と第二期のみである。そしてこの時期の日本の社会主義を論ずるにあたり, 著者は, 以下の四つの問いを設定する。その第一は, 自由民権期における社会主義受容のあり方を解明すること, 第二は, キリスト教を通じた社会主義の受容について, 1880 年代を中心に検討すること, 第三は, 世紀転換期の明治国家の現状を批判する対抗的思想として, 社会主義と運動が整序されてくる過程を明らかにすること, 第四は, 社会主義運動が, 帝国主義と取り結んだ関係の内実を明らかにすること, 以上である。このような時期区分ならびにその性格付け, および第一期, 第二期に関する問題設定は, 日本の社会主義思想史としてはオーソドックスなものであるという。本書の学術的意義は, 一次資料の博搜と丁寧な読解により, そうしたオーソドックスな解釈の意味を, より深いレベルまで掘り下げた点に求められよう。

著者が, 本書において, 深掘りした論点には, 以下のようなものがある。明治中期における社会主義受容が分析される第一部において, 第1章では, 社会主義と儒教思想との関連が問題化されている。その際, 自由民権期に「社会党」という概念が有していた邪説／天地の公道という両義性が, 考察の焦点となっている。同様に第2章では, 自由民権期に東洋社会党が有していた両義性が, 第3章では, 自由民権期のキリスト教界が社会主義に下していた両義的な評価が, それぞれ考察の中心をなし, 社会主義

の受容という主題が, それへの反発・批判をふまえつつ紹介されている。第4章は, 竹越与三郎の「社会問題」論を手がかりに, 民友社における「平民主義」とキリスト教と労働問題との交錯を論ずる。従来自由主義的なジャーナリストとしての印象が強い竹越与三郎と, 社会主義との意外な近接性を提示しており興味深い。

第二部では, 社会主義思想形成のさまざまなパターンが主題となる。第5章は, 片山潜の思想を中心に, 社会政策学の受容とそこからの分岐という社会主義への道が分析される。第6章では, 同じく片山の思想遍歴をたどりながら, 労働組合運動から社会民主主義思想を経て, 「革命」という理念へ到達するまでが描かれる。第7章は, 堺利彦の「家庭」論を中心に, 「親密圏」の拡大としての社会主義への到達と, そこにおける階級的抑圧と閉鎖性の自覚への到達が同時に問題化される。著者のこうした分析から明らかになるのは, 社会主義思想の形成にいたる多様な経路の存在であり, それを促した経験とパーソナリティの影響の大きさである。

第三部では, 帝国主義と社会主義の関係が主題化されている。第8章は, 日清戦争後の日本資本主義の発展の徴候として「社会問題」と「帝国主義」を取り上げ, 対立／補完としてあらわれるその錯綜する関係性を読み解いている。第9章は, 堺利彦の「非戦論」を取り上げ, その「家庭」論が, 帝国主義批判へといたる経路を, その個人史とともに明らかにする。第10章は, 日本の社会主義者たちが, 帝国の社会主義者というみずからの立場性をどのように認識していたかを, 非戦論・人種問題・アジア非圧迫民族との連帯という三つの論点をめぐって明らかにする。

こうした本書の論点は, それ以前の研究においても問題化されてはいた。本書は, そうした既存の論点を, 資料と解釈の幅を拡げることで

補完することにより、黎明期における日本の社会主義思想の総体的な理解の深化に貢献している。

序説の意味

以上が、本書の構成の大まかな要約である。こうした構成を有する本書を、あえて序説と題した著者の意図を、どのように解釈するべきであろうか。私は、それを、本書で残された課題を明示化することにより、今後の研究の方向性を示唆するという著者の意欲のあらわれとして解釈したい。したがって本書の読解には、本書で明らかにされた問題を、いまだ残されている課題とともに考察していくことが有益であろう。

本書は、第一部の社会主義の受容、第二部の社会主義思想の形成、第三部の帝国主義との関連というそれぞれにおいて、興味深い資料と、新たな論点を提出することにより、従来の社会主義思想史に厚みを加えている。とりわけ第一部においては、「社会党」や「社会主義」といった概念の受容を、とりわけその批判者の言説に着目しながら論ずる視座が示唆的である。「儒教」や「キリスト教」が社会主義の受容に果たした役割に関しても、それを促進する側面と、阻害する側面の両面から分析が行われており、当時の日本の思想状況を、社会主義に限定されない拡がりのうちに明らかにしている。

第二部では、社会主義と社会政策との分岐をもたらしした契機として、社会政策学会の綱領制定と、その際行われた社会政策学会の主流派の側からの片山潜に対する攻撃を論じた第5章の分析、片山潜の社会民主主義の核心に、「政治的ゼネスト」を手段とする「社会革命」の主張が存在したことを主張した第6章の解釈、堺利彦の家庭をモデルとする社会主義論が、「女中」問題を契機として家庭内の「階級」的・家父長

的抑圧構造の発見を経て、最終的に家庭的親密性が揚棄されると論じた第7章の理解は、単に社会主義思想形成の多様なルートを示すだけにとどまらず、そのそれぞれのルートがたどらなければならなかった紆余曲折をもうきほりにしている。

第三部では、植民地主義に対する無関心・無理解の側面が強調されがちであった従来の社会主義思想史研究に対し、新しい視座から見直しを迫っている。第8章では、日清戦争期の労働運動をめぐる言説が、社会帝国主義的傾向を色濃く帯びていたこと、そのなかにあって、アメリカにおける移民排斥政策の批判を経由しつつ、アジア人労働者との連携論を堅持し、中国ナショナリズムに対する共感を堅持していた片山の立場の意義が強調されている。第9章では、平民社の非戦論の内実を、堺利彦と安部磯雄の微妙なズレに言及しながら解明するなかで、安部の絶対的非戦論が、日露戦争を自衛戦争と位置づけている点において、主戦論と同じ立場に立っていたとの興味深い指摘がある。第10章では、とりわけ「敬愛なる朝鮮」の著者として、平民社社会主義の朝鮮に対する無理解を代表する存在として批判されてきた木下尚江が、その後「朝鮮人の心を以て朝鮮独立問題を観ざるべからず」という立場へ変容していくプロセスに焦点を合わせており興味深い。

著者は、こうした諸点に関して、資料と解釈の両面で新しい論点を打ちだしつつも、本書が、序論で提示した日本社会主義思想史の五つの時期区分のうち、最初の二つの時期のみを扱っていることに自覚的である。その自覚が、本書を序説と名指す根本的な理由なのであろう。時間と紙幅の制約がある以上、研究書が、特定の時期に焦点を合わせてその成果を示すこと自体は、当然のことである。しかしながら、本書に関していうならば、上記の時期区分のう

ち、第五期の冷戦終結後の時代、すなわち現在の資本主義と社会主義に対する著者の評価は、決定的な重要性を有する。なぜなら、日本の社会主義と何らかの関係を有する膨大な人物、事件、資料のうち、どれを選択し、それについてのどのように語るかの基準を提供するものは、著者自身の現在の資本主義と社会主義に対する向き合い方にほかならないからである。

社会主義の現在

本書において著者は、現在の資本主義と社会主義の分析に関して、禁欲的な姿勢を貫いている。その全貌については、第三期以降を対象とする今後の研究に待つほかはないが、第一期と第二期のみを論じた本書の分析からも、ある程度その方向性を推測することができる。語られなかった現在との関連において、本書の内容を再検討することは、本書の有する思想的意義を、より明確化することにつながると信ずる。以下、本書の内容からうきぼりとなる社会主義の現在についての著者の見解を整理しつつ、あらためて本書で明らかとなった諸事実とその解釈の意味を振り返ってみたい。

本書の基礎をなす第一の前提は、冷戦終結とともに、社会主義の有効性をア priori に前提にしうる時代は終わったとの認識であろう。この認識そのものは、こんにちの多くの人びとに共有されているものであるが、興味深いのは、それをふまえた上での著者の社会主義への向き合い方である。冷戦の終結が、現存した社会主義の終わりを意味したとすれば、それ以後の時代において、なお社会主義者たらんとするものに課せられる使命は、その思想の意義と有用性を、逆風のなか、その批判者に向けて、フラットな立場から弁証することにある。こうした著者の問題意識が、日本における社会主義の受容を、その批判者との論戦を通じて描き出そうと

した本書の方法論へとつながっているように思われる。

加えて、社会主義と帝国主義との関連を論じた第三部からは、冷戦終結後に顕著となった、資本主義のグローバル化と新自由主義イデオロギーに対する著者の危機意識がうかがえる。著者が本書において、片山を中心に、移民労働者に対する連帯と排斥の問題を取り上げ、また安部と堺を中心に、平和主義の内実を踏み込んだ検討を行っているのも、それらがなによりも現在の問題であるからにほかならない。国内労働者の保護という課題と移民労働者との連携という課題は、どのように調停されるべきであるか、戦争という暴力と戦争に抗う暴力との関係は、どのように調整されるべきであるか、明治期の社会主義者が提起したこうした問題に対して、われわれはいまだ有効な解答を有していない。それを社会主義の歴史的経験のなかに探っていくことが、本書の重要な課題をなしている。

既存の社会主義の終わりは、新しい社会主義の始まりでもある。こうした認識は、社会主義の多様性への認識を促し、現存した複数の社会主義を相互に付き合わせ、批判的に検討する本書第二部の方法論の基礎をなしている。その成り立ちにおいて、きわめて異質な片山の労働運動を基盤とした社会主義と堺の親密圏を基盤とした社会主義を、相互に付き合わせたときに生まれる間隙から、著者自身の社会主義論が姿をあらわすことになるのであろう。ここで重要なのは、社会主義の複数性の認識が、単なる相対化を導くのではなく、著者自身の社会主義への構想と連動していることである。著者は、そうしたみずからの理想とする社会主義のあり方について、「社会民主主義」という名称を付与している。

「社会民主主義」の内実については、本書で

はほとんど論じられていない。それはむしろ、前著『日本社会民主主義の形成——片山潜とその時代』（日本評論社、2013年）の課題であつたろう。700頁に迫るこの著作の紹介は本稿でなしうることではない。ここでは、同書において著者が、1901年の社会民主党の綱領を取り上げ、その内容を「人種・国籍の違いを超えた人類同胞の実現、軍備全廃による世界平和の実現、階級制度の全廃、生産手段と交通手段の公有、富の公平な分配、「臣民」でも「国民」でもない「人民」の平等な参政権、そして平等な教育の実現」と要約し、「現在も生命を失ってはいない」（同書7頁）と評価していることを紹介するにとどめたい。

片山潜の思想的軌跡をたどりながら日本における社会民主主義の形成とその挫折を論じた前著と、本書の分析をつなげて考えてみると、今後の研究に向けた課題もまた明らかとなる。とりわけ重要なのは、社会民主主義とアナキズムの関係である。冷戦終結以後、グローバリ

ズムの加速化とともに、アナキズムが新自由主義への対抗思想・運動として、世界的に影響力を強めている現状に鑑みると、その批判的検討を、社会民主主義の視座から進めることは、アナキズムの思想内容を豊かにするうえでも重要な作業である。著者は前著ならびに本書において、片山の革命論を、幸徳の直接行動論と対比することにより、この問題に新たな光を投げかけた。次なる課題としては、いまだ本書で語られていない第三期＝両大戦間期において、新しい装いで登場する大杉栄を中心とする日本のアナキズムを、日本の社会主義思想史として、どのように位置づけるのが焦点のひとつとなろう。本序説の続編を期待しつつ、本稿の結びとしたい。

（大田英昭著『日本社会主義思想史序説——明治国家への対抗構想』日本評論社、2021年11月、xiv + 298頁、定価4,730円（税込）
（うめもり・なおゆき 早稲田大学政治経済学術院教授）